新刊紹介

光地英学・松田文雄・新井勝龍共編『瑩山禅』全十二巻

田中良昭

一

本書は、光地英学、松田文雄、新井勝龍の三教授が共同の編集者と同時に執筆者（一部他の執筆者による部分あり）となり、特に光地教授が全巻の中心的執筆者兼編集主任として全体を統括して刊行された瑩山禅師の全撰述の解明を目指した瑩山禅師研究の集大成である。全体で十二巻からなり、その第一巻が昭和六〇年三月に刊行され、以後巻を重ねて最終の第十二巻が刊行されたのが平成六年四月であるからして、原稿の準備期間を含めれば優に十年以上の歳月を費したことになり、また一巻の平均が三五〇頁、全十二巻の総頁数が四一八三頁にものぼる大部なものである。

さて、本書を編纂する意図については、編集主任の光地教授が第一巻の巻頭に示された「序文」の中に明らかにされている。今それを要約して述べれば、日本曹洞宗には道元禅師と瑩山禅師を両祖と仰ぐ独自性があり、宗学も両祖の思想・宗教がその基本でなければならないという基本的立場に立ちつつ、現在の曹洞宗の宗学が、概ね道元禅師に依っている状況に憶いを致して本書の刊行を意図したという。そして今回の出版が、明日へのよりよき瑩山研究の導火線となり、道元禅と瑩山禅の止揚的研究成果により、将にあるべき曹洞宗学の確立を期待するものであることが強調されている。

ところで当初の出版予定では、『瑩山教学の総合的研究』と題する八冊本とし、それを本文篇と思想篇に分け、本文篇は『伝光録』全四冊、『瑩山清規』一冊、『洞谷記』一冊、『信心銘拈提』『坐禅用心記』等瑩山禅師の著作八種に、二大高弟の法語である『明峰法語』と『峨山法語』を加えて一冊の七冊に、思想篇として各角度からの瑩山教学の論考を集めた一冊とするというものであった。しかし実際的には、『信心銘拈提』だけで一冊を要し、或いは『瑩山清規』が二冊となる等、その後に種々の変更を余儀なくされ、左記に掲げるような全十二巻を以って完結する内容のものとなったのである。以下各巻ごとにその内容を列挙してみよう。

第一巻　伝光録講解(1)　首章より第十二章まで

第二巻　伝光録講解(2)　第十三章より第二十八章まで

第三巻　伝光録講解(3)　第二十九章より第四十二章まで
第四巻　伝光録講解(4)　第四十三章より第五十二章まで　尚、末尾に附載一として光地教授による「伝光録の筆写本について」と「伝光録の諸問題と基本精神」と題する二論考、附載二として本書に対する推薦文四種が加えられている。
第五巻　信心銘拈提講解　付解説
第六巻　瑩山清規講解(上)　巻之上
第七巻　瑩山清規講解(下)　巻之下　付解説
第八巻　洞谷記講解　洞谷山永光寺草創記より投下状式に至る二〇項目
第九巻　洞谷記講解（続）　祖師忌より羅漢供祭文に至る五項目及び洞谷記附載五項目
坐禅用心記・三根坐禅説・十種疑滞・十種勅問・仏祖正伝菩薩戒教授文各講解　付各解説
第十巻　瑩山清規（附著）・瑩山和尚法語・洞谷開山瑩山和尚之法語（補遺）・瑩山瑾禅師語録・瑩山瑾禅師語録拾遺・常済大師真筆類纂・秘密正法眼蔵各講解　付補説・解題・解説等
第十一巻　明峯和尚法語・智首座に与ふる法語・峨山和尚法語各講解
論文　瑩山禅乃至は瑩山禅師に関する論文一四種
第十二巻　瑩山補遺・総説　(一)御撰述　(二)修証論　(三)諸問題　(四)瑩祖讃仰・跋文・後記・総索引

以上が全十二巻の内容である。以下それぞれの著作についてその講解等の概要を紹介することにしたい。

二

まず第一巻から第四巻までを費してなされた『伝光録』の講解についてみることにしたい。いうまでもなく『伝光録』は、道元禅師の『正法眼蔵』と並ぶ曹洞宗の根本聖典であり、瑩山禅師の代表的著作であって、それを全巻の冒頭に位置づけたのは至極当然のことである。その内容は、曹洞宗の伝灯、すなわち釈迦牟尼仏からインドの相承二十八祖、中国の相承二十三祖、更に日本の相承として道元禅師と懐奘禅師までの一仏五十二祖をそれぞれ一章として全体で五三章からなり、各章はそれぞれの祖師の悟道の因縁を中心として仏祖の命脈の由来を明らかにしたものである。

ところでこの書は、瑩山禅師が加賀金沢の大乗寺にて、正安二年（一三〇〇）正月一一日から開示されたものを侍者が筆録したものであり、本則と頌古は漢文、機縁と拈提は仮名混じり文で示されている。安政四年（一八五七）、近江彦根の清涼寺の仏洲仙英が数種の写本を対校していわゆる仙英本を刊行するまでは、すべて伝写本であった。その写本は、永享二年（一四三〇）以降の書写とされる愛知県の乾坤院本以下二〇種の多きを数えており、本書では明治一八年鴻盟社刊の本山版『伝光録』を底本とし、対校には先の乾坤院本、元録九年（一六九六）筆写の天林寺本、延享三年（一七四六）筆写の永平寺本、宝暦八年（一七五八）筆写の無禅本と最初の刊本

である仙英本の五種が用いられている。

『伝光録』の写本には、本来項目は立てられていなかったが、後に版本にされた際に、各章が本則・機縁・拈提・頌古の四種に類別され、本書もそれに依っている。すなわち本書では、それぞれの本文を適宜区切りを設けて〔本文〕として示し、その本文の出入異同を冠註で示し、続いて漢文のものについては読み下し文（和文）を掲げ、その後はすべての本文について主要な語句の解説（語釈）、本文全体を通した解釈（通釈）、必要に応じてのコメント（補説）、本文の典拠（渉典）の順で逐次解説を加えている。

次に第五巻の『信心銘拈提』の講解についてみてみよう。瑩山禅師が、数多い祖録の中で拈提をこころみ後世に残されたのは、この『信心銘拈提』が唯一のものである。『信心銘』そのものについては、その成立にまったく問題なしとはしないが、中国禅宗でもっとも早い時期に出現した三祖僧璨の著作とされるものであり、四言一四六句、五八四文字でもって禅の要諦をうたいあげた禅僧の偈頌の代表的なものとされている。瑩山禅師以前にこの書を拈提したものとしては、中国曹洞宗に属する真歇清了による『信心銘拈古』があり、また瑩山禅師とほぼ同時代に、同じく中国臨済宗楊岐派十一世の中峰明本による『信心銘闡義解』があるが、日本における拈提としては、瑩山禅師の『信心銘拈提』をもってその嚆矢とする。この書は、瑩山禅師が大乗寺住山中に著わしたもので、『信心銘』の四言二句ごとに漢文にて拈提をほどこしたものである。

その原本は、久しく総持寺の宝庫に秘蔵されていたが、瑩山下四世の法孫である惟忠守勤が総持寺に勅住した際に上梓を発願し、原本の修復に当った。しかしその際は出版には至らず、その後享保一九年（一七三四）に霊苗天産が摂津泉流寺蔵版として自跋を添え、木版一冊として出版されたのが最初である。その後、万回一線により元文元年（一七三六）と寛延三年（一七五〇）の二回にわたり出版され、更に近代に至っては、『曹洞宗全書』宗源下は享保一九年本に、『大正蔵経』巻八二は元文元年本によっているが、『常済大師全集』は明治四二年（一九〇九）に畔上楳仙による『信心銘拈提落草談』中の「信心銘拈提」を主とし、それに享保一九年本と寛延三年本とを対校したものである。本書の講解には、この『常済大師全集』本により、他本との異同を冠註に示す方法がとられ、まず『信心銘』本文の四言二句を出し（漢文）、読み下し（和文）、語句に註を加え（語釈）、全体を解釈し（通釈）、必要に応じてコメントを付す（補説）という形式は、先の『伝光録』の講解の方法と同一であり、第六巻以後の諸著作の講解に際してもこの手法でもって貫かれている。そして巻末には、この書の思想的特色に関する「解説」が付されている。

三

次に第六巻と第七巻の二巻からなる『瑩山清規』の講解に移ろう。そもそも清規とは、禅院における修行生活の規範を定めたものであり、中国で禅宗が独立した頃に編纂された『百丈清規』をその嚆矢とするがそれは現存せず、現存するものでは、北宋の長盧宗賾

の『禅苑清規』が最古のものである。日本曹洞宗の開祖道元禅師は、この『禅苑清規』に基いて『永平大清規』を制定されたが、それは叢林の規矩とその意義、及び修行者の心得を示した六篇からなるものである。これに対して瑩山禅師の『瑩山清規』上下二巻は、上巻に日中と月中の両行事、下巻に年中行事を配し、叢林における行事の具体的次第を示したものであって、『永平清規』と共にその後の宗門の行持規範の基本とされたものである。

その成立は、月中行事の十五日の項に、元応元年（一三一九）九月一五日に初めて羅漢供を修したという年時の記載があり、年中行事では、元亨四年（一三二四）正月一日以下すべてこの年のみの日付があるところから、まず日中と月中の行事が成立し、その後元亨四年、つまり瑩山禅師示寂の前年になって年中行事が成立してその原型が整ったとされている。

しかしこれが実際に公にされたのは、太容梵清によって永享六年（一四三四）二月に筆写され、大乗寺に秘蔵されていた『能州洞谷山永光禅寺行事次第』一巻が最初であり、次いで文明八年（一四七六）愚休の書写になる『能州洞谷山永光寺行事次第』一巻と明応一〇年（一五〇一）巨岳麟広の書写になる『能州洞谷山永光寺行事次第』には、日中と月中の行事の次第しかない。しかしてその二年後の文亀三年（一五〇三）に大仲光椿によって筆写され、永光寺に収蔵されていた『能州洞谷山永光禅師行事次第』二巻には、日分・月分・年分のすべてが収載されているという。その開版は延宝六年（一六七八）一二月に、月舟宗胡、卍山道白によって初めてなされ、その三年後の延宝九年（一六八一）に改訂本が出版されて流布本となるのであるが、それが基いたのは、最古の写本の梵清本であり、その後の写本をも参照して整えられたとみられている。今回の『瑩山清規』の講解の底本に用いられたのは、延宝九年本によった『常済大師全集』本であり、それに前述の梵清・愚休・麟広・光椿の各書写本を対校して校勘がなされている。尚巻首には、延宝六年に開版されるに際して卍山が撰した「瑩山和尚清規序」の本文と読み下し文（和文）が付されていて版行の由来が明らかにされ、また下巻の巻末には、応永三〇年（一四二三）正月に、瑩山下五世の法孫である梵清が、永光寺の紀綱寮に常住された旧本の字画が漫滅し、編次が正しくないのを補正した際の跋文と読み下し文（和文）が加えられ、特に『瑩山清規』の特色についての解説を付している。

次に第八巻と第九巻の首部にまたがる『洞谷記』の講解に移ろう。『洞谷記』は、永光寺の山号である洞谷山にその名が由来する如く、瑩山禅師が正和元年（一三一二）頃から正中二年（一三二五）頃にかけて記された永光寺の開創時代の記録である。その内容は、「洞谷山永光寺草創記」に始まり「羅漢供祭文」に至る間に、各種の随感・随想・日記・縁起類・行業略記・置文・行事次第・行事作法・開創並に住山寺院・四門人六兄弟その他の門流、準門流・信徒・自伝・如浄、道元、懐奘、義介の四祖の伝等、初期曹洞教団に関する諸記録が集録された貴重なものである。

その写本としては、永享四年（一四三二）筆写の『瑩山和尚洞谷記』一巻三十一紙（秘本）が大乗寺に秘蔵されており、同じく大乗

寺所蔵の享保三年（一七一八）筆写流布本と共に、現在石川県立美術館に委託保管されており、その他に能登永光寺所蔵本、駒大図書館蔵本があるという。今回の講解に当っては、大乗寺蔵流布本の元とされた永光寺本を底本とし、他の三本を校合し、特に大乗寺秘蔵の秘本がより原形を止めているところから、厳密な校定を行ったという。解説は第九巻首部の「洞谷記講解」の末尾に付されているが、重要なのは古写本『洞谷記』と流布本『洞谷記』との構成上の差異の大なることである。流布本の元になった永光寺本を底本とした今回の講解のテキストは、当然古写本『洞谷記』との間に構成上の差異が著しく、その相異を明確にするための両者の項目別対照表が必要とされ、それを掲げていることである。更に『瑩山禅師全集』にあるその後の附載の部分についての講解が追加されて終っている。

第九巻の『洞谷記』の講解に続いては、『坐禅用心記』及び『三根坐禅説』の講解となる。『坐禅用心記』は、道元禅師の『普勧坐禅儀』と共に宗門の坐禅に関する基本典籍とされるもので、それは永らく総持寺、永光寺、大乗寺等に襲蔵されていたが、卍山道白が大乗寺に住山するに及んで、延宝八年（一六八〇）に序文を撰し、更に『三根坐禅説』に後序を付して、翌延宝九年（一六八一）『瑩山清規』の改訂版と共に刊行し、一般に知られるに至った。更に宝暦八年（一七五八）に指月慧印が『坐禅用心記・三根坐禅説不能語』を刊行したのが註釈書の嚆矢であり、以後多くの註釈が出版されている。両者の解説は、それぞれの講解の後に付されている。

次に『十種疑諦』と『十種勅問』（『十種疑問』）の講解がなされ、両者が終ったところで一括して解説がある。その解説によれば、一般に『十種勅問』と呼ばれるものには、かねてより永光寺に伝承された元応二年（一三二〇）の『十種疑滞』と、総持寺に伝承された元亨二年（一三二二）の『十種勅問』の二種があったが、近年田島柏堂氏により同じく総持寺に伝承され、現在は金沢市山上家の所蔵になる元亨元年（一三二一）の『帝尊問答』が発見紹介され、かくして『疑滞』『問答』『勅問』の三種が各年毎に成立したことが明らかにされたという。しかし実際には、勅問も一度、奏対も一度というのが編者の見解とされ、『疑滞』の日付のある元応二年（一三二〇）九月六日以前、恐らく同年の早い時期に勅問があり、当時永光寺住山中の瑩山禅師に伝達され、翌元亨元年の総持寺開闢を経て、『勅問』末尾の「紹碩謹書」にある如く元亨二年（一三二二）に奏対されたとする推論をされている。しかし本書では、編者が『帝尊問答』を未見ということもあって、『十種疑滞』と『十種勅問』の二種についてのみ講解がなされており、両者を比較して前者は草稿的、後者は完成的といい、また『帝尊問答』は『十種疑滞』とほぼ同一内容とする田島説が紹介され、こうした三本の存在することが、偽作説に疑義を挟む余地ありとする見解が述べられている。

続いて『仏祖正伝菩薩戒教授文』がある。これは和文で書かれ、一般に『教授戒文』と呼ばれるもので、懺悔に始まり、三帰、三聚浄戒、十重禁戒の十六条戒の授戒作法からなり、これは道元禅師が

諸人に授け、懐奘禅師が教授師であった際に戒の大綱を説かれたのを、元亨三年（一三二三）八月二八日に瑩山禅師が慧球姉公に授戒するに際し、訓のまま仮名書きして与えたものであることが説かれている。

尚末尾に「解説」があり、それによればこの瑩山禅師真筆の『教授戒文』は、永らく富山県海岸寺に秘蔵されていたが、昭和四一年に国の重文に指定されると共に公開されたという。

四

第十巻の巻首には、先に第六、第七の両巻で採り上げた『瑩山清規』の附著として、梵清の跋文以降にある各種の「疏」や「行事次序」等を挙げて講解し、その後に瑩山禅師の「法語」と「語録」の講解に入っている。まず「法語」としては、『瑩山和尚法語』と『洞谷開山瑩山和尚之法語（補遺）』の二篇がある。いずれも禅宗仮名法語の範疇に属するもので、禅思想を平易に説き示そうとした苦心の跡を示すものである。

まず『瑩山和尚法語』は、古くからその存在の知られたもので、明暦三年（一六五七）に刊行された『永平開山道元和尚仮名法語』の下巻中に「洞谷開山法語」の名で収録され、初めて世に知られるに至ったものである。その内容は、一一の問答からなり、主として坐禅工夫の用心を説いたものであり、講解に際しては『常済大師全集』本を底本とし、先の明暦三年本を対校に用いている。今一つの『洞谷開山瑩山和尚法語（補遺）』は、岩手県正法寺に所蔵されているもので、近年になってその存在が知られるに至ったものである。それは、妙浄、すなわち永光寺の土地の寄進者である黙譜祖忍尼の夫である海野三郎信直に与えるために提示されたものといわれ、文明年間の火災以後に紛失したが、永正一二年（一五一五）八月一五日の瑩山禅師二百年忌に当って、正法寺七世の寿雲良椿が報恩の為に書写したとする識語を有するものである。

次に「語録」としては、『瑩山瑾禅師語録』と『瑩山瑾禅師語録拾遺』の二種がある。前者は正式には『能州洞谷山永光寺瑩山和尚語録』といい、侍者の源祖が編集し、本来『洞谷記』の末尾に付されていたのを分割して一本としたもので、瑩山禅師の上堂と小参のみを編集している。しかも最初の部分に四月八日仏生上堂、末尾が六月一日上堂であって、その年次は不明であるが、ごく短期間に成ったものとみられている。この書は写本のみで伝承され、最古のものは加賀金沢大乗寺蔵の永享四年（一四三二）英就書写本であり、その他に享保三年（一七一八）筆写の大乗寺蔵本、年代不詳の永光寺蔵本等があるという。講解には『常済大師全集』所収本を底本とし、前記三本を対校に用いている。次の『瑩山瑾禅師語録拾遺』には、その多くが『洞谷記』中に同文のものがあり、両者に共通するものについては「本文」のみを示して他を略し、（補説）で両者の異同を指摘するに止めている。

続いて『常済大師真筆類纂』として、『法衣相伝書』『自賛』『洞谷山永光寺尽未来際置文』『総持寺中興縁起』『洞谷山四至堺田畠注文』『洞谷山文書注文』『洞谷山寄田注文』『総持寺十箇條之亀鏡』

『洞谷山勤行條文』『示性禅姉公』『自賛』『仏祖正伝菩薩戒作法奥書』『明峰禅師立僧普説』『済家嗣書伝授書』『三木一草文』『韶陽折脚之画賛』『龍天白山之書』の一七種を挙げ、それぞれの所蔵者、染筆の際の瑩山禅師の年令、その内容等を簡単に記した「はじめに」と題する一文が添えられている。またその殆んどが、総持寺発行の『瑩山禅師御遺墨集』に複写され、同『解説』にその訓読がなされていて、講解に際してはそれに依ったことが「序」に記されている。

最後に『秘密正法眼蔵』が挙げられる。その「序」によれば、この書は大正一四年（一九二五）に初めて刊本とされたもので、その内容は古徳の機縁十則を拈提したものであるが、その名の示す通り祕伝的なものとされたところに特色があるという。ただ近年一〇種の異本や三種の末疏の存在が確認され、その写本は永光寺本と六地蔵寺本の二系統に分けられ、永光寺本は永光寺教団の祕伝書とされ、一方六地蔵寺本はより原初の型態を保つことが推定されているという。従来、公案工夫を薦める点や門参類に属する祕伝的性格が後代に属するという理由で真撰説に疑念が持たれていたが、近年の多くの写本の出現等によって、真撰説を否定する積極的な理由はないとする見解も出されている。

第十一巻の首部は、瑩山禅師の二大神足とされる明峰素哲と峨山韶碩の法語についての講解がある。すなわち前者の『明峰和尚法語』『智首座に与ふる法語』と後者の『峨山和尚法語』である。「法は明峰、伽藍は峨山」と称され、瑩山禅師の禅風を継承し発展させた二大門人の法語をもって、瑩山禅のしめくくりをしようとの意図に基くものである。

以上でいわゆる本文篇ともいうべき瑩山禅師の著述に関する講解をすべて了じ、ついで思想篇として構想された「論文」一四点を掲載する。いずれも「瑩山禅師」乃至は「瑩山禅」をめぐる諸問題を、各執筆者が自らの専門分野に視座を置いて論じたものである。一四人の執筆者中、一三人までが駒沢大学に直接関係のある方がたであるが、唯一人中村元博士が「瑩山禅師の思想史的位置づけ—随想—」と題し、キリスト教のベネディクト会修道院との対比を通じ、比較思想的見地から瑩山禅師を論じられた点は特筆すべきことである。

そして最後の第十二巻では、従来の著述に未掲載の瑩山禅師に擬せられる三種についてこれを「瑩山補遺」として挙げ、次に〔総説〕として、㈠御撰述と題し、本書に採りあげた著作についてその書誌学的な諸問題を総括的に提示し、㈡修証論と題し、瑩山禅師の修証観を論述し、㈢諸問題と題し、両祖論、瑩祖と密教、五老峰、総持寺、弟子群等、瑩山禅の主要な問題を解明し、最後に㈣瑩祖讃仰と題し、瑩山禅師の人為を多方面から讃仰して〔総説〕の結びとしている。それに続いては、全十二巻全体の「跋文」及び「後記」があってすべてを完了し、後半約三分の一のスペースをさいて、全十二巻すべてにわたる索引を、「仏、菩薩、神名」「人名」「経典名」「寺社、建造物品」「地名」「事項」に分けて掲載し、読者の便をはかっている。

以上、『瑩山禅』全十二巻について、その内容の概要を紹介してきた。本来ならば、その構成、講解の内容、学問的価値等についての論評がなければならないが、それは専門領域を異にする私の任には負えないことを卒直に述べなければならない。本稿を「書評」とせずに「新刊紹介」とした理由もそこにある。しかし全巻を通してみて、編集及び執筆に当られた方がた、とりわけ編集主任として本書の刊行を推進された光地教授のひたすらなる瑩山禅師への思慕の念、讃仰の赤心が全篇に横溢していることは、十二分に汲みとることができた。そうした深い道念なくしては、本書の完成は到底あり得なかったことだけは確かなことである。

山喜房仏書林　昭和六〇年三月～平成六年四月、A5版、全十二巻総頁　本文四、〇五〇頁　索引一三三頁　九二、一五五円